

2001 年度

NGO－JICA 合同ワークショップ

－地域で活かす、地域を活かす、国際協力！！－

報告書

日時：2002 年 3 月 2 日（土）～3 月 3 日（日）
場所：国際協力事業団九州国際センター（1 日目）
福岡天神ビル（2 日目）

主催：NGO-JICA 合同ワークショップ準備委員会
（NGO 福岡ネットワーク／国際協力事業団九州国際センター）

九州セ

J R

01-05

目 次

I	ワークショップ概要	
1.	実施要項	3
2.	全体日程	4
3.	準備委員会リスト	5
II	PCM 研修	
1.	プログラム	6
2.	研修内容	7
3.	アンケート集計結果	18
4.	参加者リスト	21
III	分科会・全体会	
1.	プログラム	22
2.	アンケート集計結果	23
3.	分科会内容	
(1)	第1分科会	25
(2)	第2分科会	34
(3)	第3分科会	43
(4)	第4分科会	50
(5)	第5分科会	59
4.	全体会	66

I ワークショップ概要

1. 実施要項

(1) 実施目的

- ・国際協力を実施する関係機関間のよりよい連携を目指して、相互理解を深める場とする。
- ・九州 NGO のネットワーク作り、情報・意見交換の場とする。
- ・活動活性化と組織強化を目指した能力向上・相互研修の場とする。

(2) 実施日時

平成14年3月2日（土）、3日（日）

(3) 実施場所

1日目：国際協力事業団九州国際センター

2日目：天神ビル（福岡市中央区天神）

(4) 主催

NGO-JICA 合同ワークショップ準備委員会
（NGO 福岡ネットワーク／JICA 九州国際センター）

(5) 内容・対象

1日目（3月2日）：PCM 研修*

対象：九州地域で活動する NGO のスタッフ

2日目（3月3日）：分科会

対象：NGO、国際協力関係機関、自治体関係者、国際協力に関心がある方

<テーマ>

第1分科会：地域で盛り上げる国際協力！

～九州地域の NGO や国際協力団体の支持基盤拡大のために～

第2分科会：真のパートナーシップを目指して ～南の NGO との関係のあり方～

第3分科会：農村開発 ～地域の結びつきで知恵を生かす～

第4分科会：明日を拓く子どもたち ～教育と子ども、その可能性について～

第5分科会：環境に国境はない！

～効果的な環境協力のためのよりよい連携を目指して～

* PCM 手法とは、開発援助プロジェクトの企画・実施・評価という一連のサイクルを「プロジェクト・デザイン・マトリックス（PDM）」と呼ばれるプロジェクト概要表を用いて運営管理する方法。

2. 全体日程

1日目（3月2日）

時 間	内 容	備 考
9：00	受付	
9：30～10：00	オリエンテーション 自己紹介	全体
10：00～10：30	PCM 手法について	全体
10：30～11：30	事例：「海外での農村開発」 関係者分析の理論と演習	全体
11：30～12：30	問題分析及び目的分析の理論	全体
12：30～13：30	休憩	
13：30～15：00	問題分析及び目的分析の演習 プロジェクトの選択及びPDMの理論	グループ別 全体
15：00～16：30	プロジェクトの選択及びPDMの演習	グループ別
16：30～17：30	PCM 手法の活動事例 質疑応答 研修のまとめ	全体
18：30～	交流会	

2日目（3月3日）

時 間	内 容	備考
10：00	受付	
10：30～15：00	<u>分科会</u> ・第1分科会：「地域で盛り上げる国際協力！」 ・第2分科会：「真のパートナーシップを目指して」 ・第3分科会：「農村開発」 ・第4分科会：「明日を拓く子どもたち」 ・第5分科会：「環境に国境はない！」	1 号室 2 号室 3 号室 7 号室 8 号室
15：00～15：30	アンケート記入	
15：30～16：30	全体会	11 号室

3. NGO-JICA 合同ワークショップ準備委員会リスト

伊東 弘	NGO 福岡ネットワーク 事務局長
原田 君子	クルンテプの会 代表
高柳 彰夫	JVC 九州ネットワーク 代表
寺嶋 悠	債務と貧困を考えるジュビリー九州 共同代表
重田 康博	債務と貧困を考えるジュビリー九州 運営委員
吉野 あかね	地球共育の会・ふくおか 代表
西嶋 克司	明日のカンボディアを考える会 事務局長
黒津 真弓	明日のカンボディアを考える会
大谷 賢二	カンボジア地雷撤去キャンペーン 代表
河野 佐恵子	九州大学大学院人間環境学科
大久保 宏明	国際協力事業団九州国際センター総務課 課長代理
江崎 千絵	国際協力事業団九州国際センター総務課
藤家 斉	国際協力事業団九州国際センター業務課
山下 亜樹	国際協力事業団九州国際センター 国際協力推進員

Ⅱ PCM 研修

1. プログラム

(1) 概要

PCM 研修には、九州内の NGO から 22 名、JICA から 11 名の計 33 名が参加した。通常 3 日間で行われる研修を 1 日で実施したため、駆け足の研修となり、最終的に PDM を完全に完成するまでには至らなかった。しかし、参加者からは参考になった等の肯定的な評価が多数を占めたことからわかるように、参加者にプロジェクトを策定する際の新たな視点を提供することができた。

(2) 目的

国際協力に従事する人材の能力向上を目的に、グループワークを通じて国際協力プロジェクトを運営管理する方法を学ぶ。

(3) 対象

九州 7 県内で活動する NGO のスタッフ及び JICA 職員・国際協力推進員

(4) 日程

時 間	内 容	備 考
9 : 00	受付	
9 : 30 ~ 10 : 00	オリエンテーション 自己紹介	全体
10 : 00 ~ 10 : 30	PCM 手法について	全体
10 : 30 ~ 11 : 30	事例：「海外での農村開発」 関係者分析の理論と演習	全体
11 : 30 ~ 12 : 30	問題分析及び目的分析の理論	全体
12 : 30 ~ 13 : 30	休憩	
13 : 30 ~ 15 : 00	問題分析及び目的分析の演習 プロジェクトの選択及び PDM の理論	グループ別 全体
15 : 00 ~ 16 : 30	プロジェクトの選択及び PDM の演習	グループ別
16 : 30 ~ 17 : 30	PCM 手法の活動事例 質疑応答 研修のまとめ	全体
18 : 30 ?	交流会	

2. 研修内容

<概要>

テーマ	パール国という架空の国の「バラト地区」を対象とした開発計画を策定する。	
モデレーター	花田 重義	株式会社国際マネジメントシステム研究所代表取締役
副モデレーター	柿沼 潤	株式会社アースアンドヒューマンユーボレーション
	興津 暁子	パシフィックコンサルタンツインターナショナル プランニング事業部
	河野 佐恵子	九州大学大学院人間環境学科
	江崎 千絵	国際協力事業団九州国際センター総務課

<オリエンテーション・自己紹介>



モデレーターの花田先生による、PCMの理論、歴史、どのように使われているかについての説明



参加者全員が自分の名前、所属、関心事、海外経験を書き、前にはりだす。



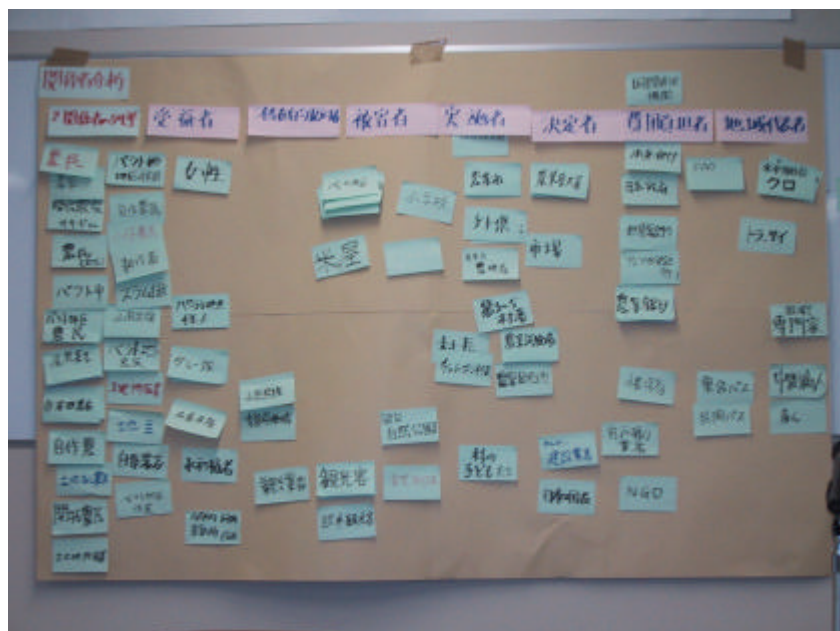
参加者全員による自己紹介

＜関係者分析＞

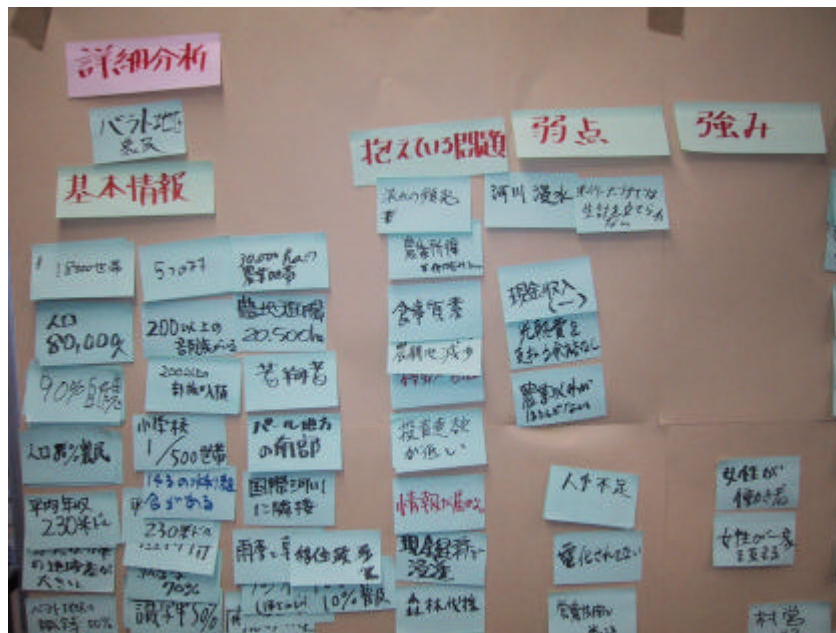
モデレーターの花田先生が、関係者分析の目的・方法について説明した後、参加者全員がパール国バラト地区を事例とした関係者分析を行った。



「バラト地区」関係者の抽出



抽出した関係者をそれぞれプロジェクトの「受益者」「潜在的反対者」「被害者」「実施者」「決定者」「費用負担者」「地域代表者」に振り分けを行った。参加者は関係者を分類することの意味、難しさ、プロジェクトの内容によっては「受益者」にも「被害者」にもなりうることを実感していた。



関係者の中の「バラル地区農民」を対象とした詳細分析を行い、「基本情報」「抱えている問題」「弱点」「強み」「ニーズ」「可能性」「対応策」といった情報を整理

＜問題分析＞

問題分析では、参加者を3つのグループに分け、「バラト地区農民」をターゲットグループとして、それぞれのグループでバラト地区が抱えている問題を抽出し、出てきた問題同士の因果関係（原因と結果）を分析して問題系図を作成した。



各参加者がバラト地区農民が抱える問題点を抽出



抽出された問題の因果関係を分析



参加者同士でディスカッションをしながら、問題分析を進める



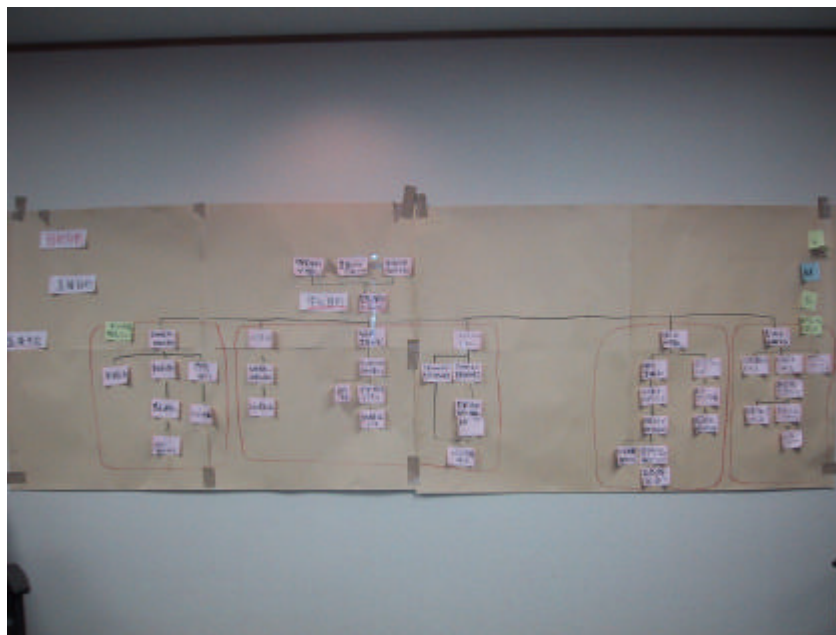
完成した問題系図

<目的分析>

目的分析では、問題分析によって完成した問題系図をもとに、その問題が解決した結果の理想的な状態を示す系図を作成した。



「問題が解決した理想的な状態」への書き換え作業



完成した目的分析図

＜プロジェクトの選択及び PDM の作成＞

各グループ毎に、目的分析の結果によってでてきたいくつかのプロジェクト候補からプロジェクトを選択し、プロジェクトデザインマトリックス（PDM）を作成した。通常3日間で行う PCM 研修を1日で行ったため、最後の PDM を作成する時間があまりとれず、各グループ共に完全な PDM を作成するには至らなかった。



PDMの作成。目的分析図をもとに「プロジェクト目標」「目標を達成するために必要な成果」「成果を達成するために必要な活動」を決定し、さらにそれら「目標」や「成果」を達成度を測るための指標を何にするかということを話し合った。

Aグループ PDM

プロジェクト名：農業生産向上プロジェクト

対象地域： 6200

期間：5年

ターゲットグループ：6200

Ver. No : 1

作成日：2002年3月2日

プロジェクト要約	指 標	入手手段	外部条件
上位目標 農民が自立する 米作のみでも生計がたてられる			
プロジェクト目標 農作物の収穫高が増える			国際市場における米価の安定
成 果 ①農業の多角化を促進する ②安定した水供給 ③単位面積当たりの収穫高を増やす ④リーダーが養成される ⑤洪水被害が減少する	①大豆、豆類の収益を全体の20%にする ②灌漑率を50%まで引き上げる ③農業普及員500世帯にひとり ④冠水する農地を10%にとどめる		
活 動 1-1大規模な研修を実施する 1-2農業指導者を派遣 2-1水事業専門家による現地調査 2-2水利組合の組織化 3-1普及員のトレーニング 3-2農業指導者の派遣 4-1堰強化の為に助成金制度を水利組合を対象に実施する 4-2講習会を行う 4-3日頃から米を蓄えておく	投 入 相手国 NGO		普及員の定着 現在より森林が荒廃しない 前提条件 パール国農地局の認可がおりる

Bグループ PDM

プロジェクト名：持続可能な農業プロジェクト

対象地域：バラト地区5ヶ村

期間：5年

ターゲットグループ：農民

Ver. No :1

作成日：2002年3月2日

プロジェクト要約	指 標	入手手段	外部条件
上位目標 農民が自立できる			農民が外に流出しない
プロジェクト目標 5ヶ村の村民が持続可能な農業 によって生産性を高める			農作物の価格が下がらない
成 果 1 農民が適性技術を習得する 2 多品目生産の農民の増加 3 循環型農業が普及する	①対象者/量 ①質 対象地区農民70% 適性技術を用いて多品目生産が出来ている ①時期：5年後 ①地域場所：バラト地区5ヶ村 ②5年後までに1ヶ村3名の普及員を育成する ②3年目に米以外の作物を3品目生産できる ②5年で多品目農家が50%になる ③たい肥づくり技術を持つ農家が5年目に70%		洪水が起こらない サイの被害がない 害虫の異常発生が起こらない
活 動 1-1 土地適性調査 1-2 品目毎の技術を普及させる 1-3 技術講習会を開く 1-4 品目毎の技術を学ぶ 1-5 モデル農場をつくる 2-1 政府が試験場をつくる 2-2 普及員への技術講習を行う 2-3 普及員を増やす 2-4 農民への技術講習を行う 3-1 モデル農家をつくる 3-2 たい肥づくり 3-3 指導員の育成 3-4 ラジオ番組『明るい農村』	投 入 日本 ○○国 人材 人材 機材 施設 機材 機材		洪水が起こらない 部落間の対立がない 前提条件 プロジェクト地域の理解を 得られる

Cグループ PDM

プロジェクト名：一村一品プロジェクト
対象地域：バラト地区の一村

期間：3年
ターゲットグループ：バラト地区の農民

Ver. No : 1
作成日：2002年3月2日

プロジェクト要約	指 標	入手手段	外部条件
上位目標 所得が増す			
プロジェクト目標 農産加工により収入が増える			
成 果 ①農産加工品の販売ルートを確立 ②農産加工ができるようになる	バラト地区の農民の所得が20% 上昇する	所得調査	
活 動 ①-1所得調査をする ①-2市場へのアクセスを改善する ①-3組織化する ①-4農協をつくる ①-5共同出荷をする ①-6近くの観光地ホテルとタイアップする ②-1人材育成 ②-2研修 ②-3農業試験場に優秀な人材を配置する ②-4優秀な普及員を十分配置する ②-5加工技術を導入 ②-6加工用に向く農作物を導入 ②-7新製品開発	投 入		干ばつがおこらない 観光客が減少しない 農作物が収穫できる 前提条件

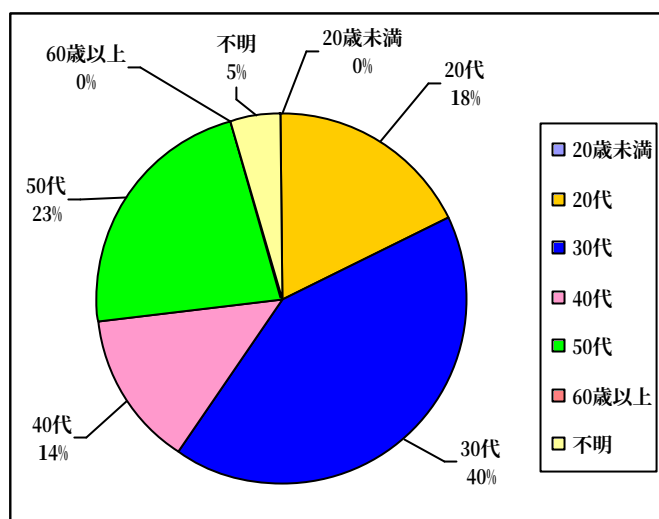
3. アンケート集計結果

Q1 参加者

年 齢	20歳未満	0
	20代	4
	30代	9
	40代	3
	50代	5
	60歳以上	0
	不明	1

性 別	男	11
	女	10
	不明	1

所 属	NGO	18
	JICA	2
	不明、その他	2



Q2 研修内容についての感想（複数回答可）

（良い）

おもしろかった	16
わかりやすかった	10
議事進行がよかった	4
出席者が良かった	2
勉強になった	16
ネットワーク作りにつながった	11

（悪い）

つまらなかった	0
難しかった	2
勉強にならなかった	0
ネットワーク作りにつながらなかった	1

（その他の意見）

- ・猛スピードだったけれど、概要は分かりました。いい機会を与えていただきました。
- ・時間が短かったため、正確な把握は難しかった。ですが、一通り体験できたことで少なくともその重要性は理解できたと思います。
- ・講師の方が実際民間企業で経験されたことをPCM,PDMに即して事例研修されたので実感して講義を受けました。
- ・組織活動を行う上で今回のPCMは意志統一、作業の効率化を図る上で、非常に便利である。大いに参考にしたい。
- ・今回、研修をうけさせていただいて、自分の知識や経験はまだまだだと思いました。もっと勉強したいと思います。
- ・時間が短かすぎる。（複数）
- ・1日でするには濃い内容でした。
- ・2, 3日かけてじっくりとやりたかった。
- ・事例の文章に誤字や理解不能な文章がいくつもあり、読みづらかった。

Q3 今後、研修をどの様に活かしたいですか

【内部で活かす】

- ・自分の活動が活かせるよう事業を行うとき有効かどうかを考える材料になったと思う。
- ・一度、私たちの会で事例研究（シュミレーション）したいと思います。
- ・これからの活動の参考になると思います。
- ・組織作りや問題解決のために会に持ち帰り、今後に役立てる。（複数）
- ・早速プロジェクトの立案に使ってみたい。
- ・他のメンバーにも報告し、実際に検討したい。
- ・4月からはじまる（予定）のプロジェクト運営に役立てたい。
- ・NGOの今後の活動方向を考える上で、目標や手段を整理するために役立てたい。（消化する必要有り）
- ・直ぐに海外で・・・というより、今関わっているNGOの組織体制を全員で見直すための手法として活かせたらと思っています。

【地域で活かす】

- ・地域との連携をはかりたい場合にここで得たつながりを活かしたい。
- ・地域提案型の事業を立ち上げる際にも、この手法が活かせるかもしれない。
- ・自分たちのプロジェクトにおいて、そして自分たちの地域に使えるように。
- ・国内でも地域保健を行っていく上で、住民参加を促す方法としてとても役立ちそうだ。
- ・国際団体のネットワークづくりの利用に。
- ・県内の地域の国際化。
- ・国際協力の点だけでなく、地域（国内）でかかえている問題に対してもPCMは有効であるので、日常の問題をPCMで見えてみたい。
- ・じっくり復習して考えます。国内活動で活用したいと思います。

【現地で活かす】

- ・現地でのミーティングの時にPCMを使います。

【その他】

- ・今回、いろんなNGOと出会ったのでこれからつきあっていきたい。ありがとうございました。
- ・現在、休職中なのですが、やはり国際協力の仕事に就きたいと思っています。その際にはPCMを是非利用したいと思っています。

Q4 研修の運営について、ご意見をお聞かせ下さい。

良かった点

- ・時間的にはかなりきつかったが、内容などはとても良かったです。
- ・本来なら4日間のコースを1日にまとめたものだったが、逆にだらだらならずにメリハリがあったのではないと思う。
- ・副モデレーターがさばけた人で良かった。
- ・経費を全てJICAに負担していただき、勉強でき、また交流会まで計画して頂きありがとうございました。
- ・参加者への配慮があって、内容も濃いものでした。
- ・事務局の準備が一番大変だったと思います。
- ・みなさん（JICAの方、モデレーターの方）、とても一生懸命に運営していただき大変感謝しています。
- ・1日に納めねばならなかったでしょうから、大変だったと思います。
- ・事前に本やプリントを送っていただいたのは良かったと思います。それがなければ、1日ではきびしいと思いました。

悪かった点、改善点

- ・時間が足りなくて、もっとゆっくり勉強したかった。
- ・もう何日間か欲しいです。
- ・やはり2日間は必要。JICA事業の中に国内NGO研修の充実の比率を大きくして下さい
- ・コーヒブレイクが欲しかった。
- ・農業、農村開発に詳しい方にモデレーターをしていただきたかった。
- ・参加者も詳しい人ばかりではなかったので、現実的になっていかない部分を感じた。

Q5 今後もこのような研修講座を希望しますか？

希望する	22
希望しない	0

またどのような研修講座を希望しますか？

- ・マネジメント。
- ・能力アップになるもの。
- ・世界のNGOの実態がわかるもの。
- ・実践NGOスタッフの理論的な活動把握や分析、学習と演習。
- ・PDA。
- ・プロジェクト手法。
- ・プロジェクト評価の方法。
- ・PCM（もう少し時間をかけて応用編を是非実現させて下さい。）（2人）
- ・PRA（2人）
- ・PLA。
- ・今回参加できなかった人に入門体験の機会を作ることの方が先かな？とも思います。

Q6 18：30からの交流会はいかがでしたか？

良かった点

- ・楽しく交流できました。ありがとうございました。（複数）
- ・普段接することのないNGOの方と交流することが出来て良かったです。
- ・JICAのスタッフの方、及びNGOの方と知り合えて良かった。NGOグループの理解と相談などが今後出来て行くと思います。
- ・楽しかったです。時間が短くて、数人の方しかお話が出来ませんでしたが、九州内での交流を必要と感じ、これを機に交流が実現できたら本当によいと思いました。
- ・九州で活動しているNGOが顔をそろえられたことは意義あるものでした。また、元気をもらえた気がしました。
- ・NGOの方が、初めて当センターに来たことも良かったです。（私の対談した方はそう言っていました。私も初めてです。）
- ・各地域の人と顔の見える間柄になれて良かった。
- ・九州外からの参加であったので、九州の人たちの文化に触れられたように思う。
- ・2次会で更につながりが出来ました。
- ・自己紹介の取り組みなど、ネットワークを作るきっかけになったのではないかな。
- ・情報交換になって非常に有益でした。

悪かった点、改善点

- ・食べる時間がないのでおなかがすいた。
- ・短かったです。（複数）

4. PCM 研修参加者名簿

	氏 名	所 属	県
1	合志 純子	宮崎国際ボランティアセンター 国内事務局	宮崎
2	戸高 豊文	インド国際子ども村 事務局長	宮崎
3	上野 匡毅	地雷ゼロ宮崎 代表	宮崎
4	梅崎 光子	国際協力事業団九州国際センター 国際協力推進員	宮崎
5	松本 正樹	インドネシア・ガルーダの会 顧問	熊本
6	中原 功一朗	熊本国際化センター インターン	熊本
7	木村 浩純	地球緑化の会 事務局次長	熊本
8	村上 竜之	国際協力事業団九州国際センター 国際協力推進員	熊本
9	甲本 洋子	カンボジア教育支援フロム佐賀 副理事長	佐賀
10	山之内 卓也	地球市民教育ネットワークかごしま	鹿児島
11	西村 宏子	DANKA DANKA プロジェクトコーディネーター	鹿児島
12	吉田 いつ子	じゃっど	鹿児島
13	酒井 マリ	国際協力事業団九州国際センター 国際協力推進員	鹿児島
14	丸野 里美	国際協力事業団九州国際センター 国際協力推進員	鹿児島
15	吉岡 正美	NGO 地球風 代表	大分
16	上好 貴子	国際協力事業団九州国際センター 国際協力推進員	大分
17	中村 清美	ワールドスタディーズセンター 代表	長崎
18	萩原 園子	アジア女性センター (AWC)	福岡
19	宮畑 実千代	明日のカンボジアを考える会 理事・運営委員	福岡
20	重田 康博	債務と貧困を考えるジュビリー九州 運営委員	福岡
21	原田 君子	クルンテプの会 代表	福岡
22	吉野 あかね	地球共育の会・ふくおか 代表	福岡
23	伊東 弘	NGO 福岡ネットワーク 事務局長	福岡
24	里川 径一	国際ボランティアを考える会 事務局長	福岡
25	花田 若菜	明日のカンボジアを考える会	福岡
26	大内 ありさ	国連ハビタット インターン	福岡
27	柴田 裕子	ラホール会	福岡
28	山下 亜樹	国際協力事業団九州国際センター 国際協力推進員	福岡
29	坂本 倫子	国際協力事業団九州国際センター 国際協力推進員	福岡
30	前原 充宏	国際協力事業団九州国際センター 業務課	福岡
31	池田 俊一郎	国際協力事業団九州国際センター 業務課	福岡
32	加藤 有紀	国際協力事業団九州国際センター 業務課	福岡
33	藤家 育	国際協力事業団九州国際センター 業務課	福岡

Ⅲ 分科会・全体会

1. プログラム

(1) 目的

- ・国際協力を実施する関係機関間のよりよい連携を目指して、相互理解を深める。
- ・九州 NGO のネットワーク作り、情報・意見交換の場とする。

(2) 対象

九州 7 県内の NGO、国際協力関係機関、自治体関係者、国際協力に関心のある方。

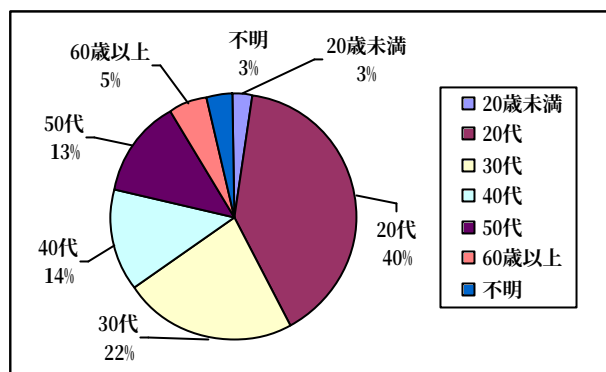
(3) 日程

時 間	内 容	備考
10:00	受付	
10:30～15:00	<u>分科会</u> ・第1分科会：「地域で盛り上げる国際協力！」 ・第2分科会：「真のパートナーシップを目指して」 ・第3分科会：「農村開発」 ・第4分科会：「明日を拓く子どもたち」 ・第5分科会：「環境に国境はない！」	1 号室 2 号室 3 号室 7 号室 8 号室
15:00～15:30	アンケート記入	
15:30 15:40 16:25 16:30	<u>全体会</u> 開会 主催者挨拶（NGO 福岡ネットワーク 二ノ坂保喜代表） グループトーク 閉会の辞（JICA 九州国際センター 山口三郎所長） 閉会	11 号室

2. アンケート集計結果

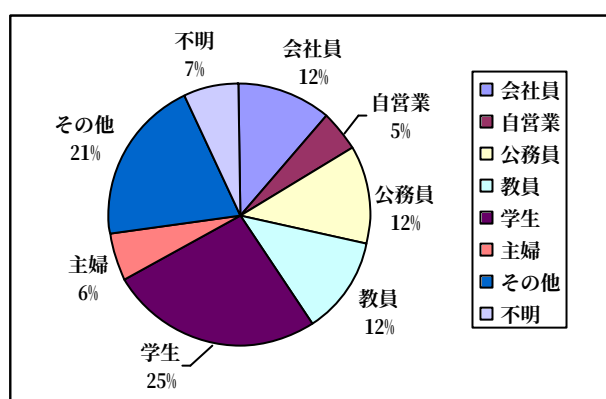
●参加者

年 齢	20歳未満	3
	20代	46
	30代	26
	40代	16
	50代	15
	60歳以上	6
	不明	4



20-30代が多く、全体的に若い年齢層の参加が多いワークショップであった。

職 業	会社員	12
	自営業	5
	公務員	12
	教員	12
	学生	26
	主婦	6
	その他	21
	不明	7

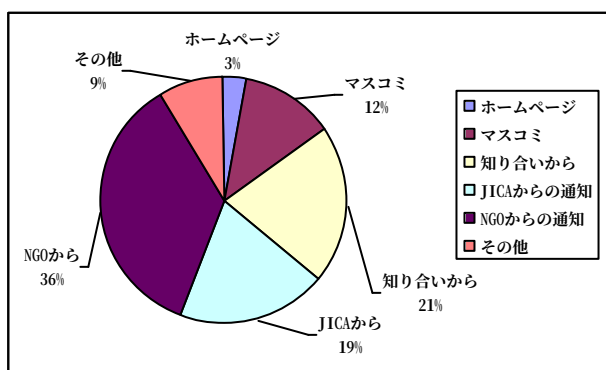


最も多かったのは学生であり、前述の若い年齢層の参加が多かったことと重なる。

性別	男性	40
	女性	65
	不明	7

●ワークショップを知ったきっかけ

ホームページ	4
マスコミ	14
知り合いから	24
JICAからの通知	22
NGOからの通知	42
その他	10



NGOから情報を得ていた人が最も多い。NGO福岡ネットワークが400枚以上のチラシを発送した他、個別のNGOも広報につとめた成果であろう。また知人というのが多いのはかなり口コミで広がっていたことの現れであろう。マスコミは西日本新聞が事前に紹介記事を掲載し、朝日新聞のサンサンネットにもものっていたが、あまり効果が大きくなかった。

●分科会についての感想（有効回答117・複数回答可）

（良い）

おもしろかった	72
わかりやすかった	25
議事進行が良かった	31
出席者がよかった	31
勉強になった	79
ネットワーク作りにつながった	13

（悪い）

つまらなかった	1
難しかった	7
勉強にならなかった	0

「おもしろかった」、「勉強になった」の肯定的評価が多い。一方で「つまらなかった」が1名だけあったが、この方も同時に「勉強になった」とも回答していて、全く得ることもなかったという参加者は皆無であったといえる。一方で「ネットワークづくりに役立った」が10%強にとどまったことはこのワークショップの目的の一つは十分達成できていないことを表すが、学生が多いなど、NGOの運営参加体験を持つわけではない参加者が多いと推定されるので、致し方ないことであろう。難しいと感じていた参加者も各分科会に若干ずついたようである。

年齢別に見ると、10・20代の47名中41名が「勉強になった」と答えている点が、特に特徴のあるところである。また学生も26名中21名が同様の回答をしている。教員は10名中9名がやはり「勉強になった」と答えている。学生や教員にとって国際協力について学ぶ場として大きな意義があったと言えよう。一方で記名してあるもののうち、NGOの運営に関わっている人、JICAや自治体職員と思われるものでも、ほとんどが「おもしろかった」、「勉強になった」の少なくとも一方に○をつけていて、NGO関係者にとっても有意義なものとなった。

幅広い年代、職業の参加者にとって得ることのあった企画であったという評価をすることができる。

●自由記述欄（詳細は各分科会ごとの集計結果参照）

- ・ここでもリソースパーソンの話など、勉強になったという趣旨の記述が多い。特に協力現場での実状など、NGOの現場の話が参考になったとの声は多い。
- ・一方で、問題提起に終わり、解決策は？という声もある。
- ・時間が短かった、あるいはリソースパーソンの話が多い、との指摘が各分科会で見られた。
- ・今後も同様の企画を望む意見も多い。子どもや南からのゲストスピーカーも参加してほしいとの意見もあり、次の企画の参考になろう。

第1分科会

「地域で盛り上げる国際協力！」
～九州地域のNGOや国際協力団体の支持基盤
拡大のために～

2002年3月3日（日）10：30～15：00

分科会のねらい

九州地区にある国際協力 NGO、地域の持続的発展を目指すグループ、自治体などの事例を紹介しながら、九州独自の国際協力活動を高めるための支持基盤拡大の方法（地域おこし、ネットワーク、開発教育、キャンペーン、NGO・自治体・JICA の連携等）を検討し、ワークショップ形式で協議を行う。

コーディネーター

重田 康博 債務と貧困を考えるジュビリー九州 運営委員

リソースパーソン

有村 耕二 佐土原町国際交流協会 副会長
伊東 弘 NGO 福岡ネットワーク 事務局長
寺嶋 悠 債務と貧困を考えるジュビリー九州 共同代表
柴田 裕子 地球市民どんたく実行委員会
(財) 福岡国際交流協会 事務局長

参加人数

25 名

分科会内容

午前：リソースパーソンによる事例紹介

●九州での地域おこしの事例

<発表者>

有村 耕二 佐土原町国際交流協会 副会長

<内容>

宮崎市の北隣の小さな町佐土原町に JICA の「21 世紀のための友情計画」をきっかけに 1995 年佐土原町国際交流協会が創立された。会員数は 52 家族(平成 13 年度現在)、海外派遣者数は約 150 名。毎年シンガポールへ小学生 10 名、マレーシアへ中学生 15 名を派遣し、学校間プログラム、視察プログラム、ホームステイプログラムを取り入れている。子ども達には異文化に接し、日本の文化を見直す良い機会となっている。また、海外からのホストファミリーの受け入れも行っており、各家庭一品ずつ料理を作って公民館等に持ちより、大人数での交流も実施している。歓迎会の中に農業体験を取り入れたり、町内外との交流の為のスキーツアーや女性共同参画事業を行ったり

もしている。

平成7年に「いちご会」が発足した。この会は駅の掃除から始め、花いっぱい運動や国際交流をしている。地域に役立つことをしたいという子ども達が大勢集まり、交流会の司会は子ども達が務めている。佐土原町の町長は「町づくりは人づくり」と考えている。この町で育った子ども達が「国際社会で共存できる日本人」になってくれることを願っている。

●福岡での NGO ネットワーク活動の事例

<発表者>

伊東 弘 NGO 福岡ネットワーク 事務局長

<内容>

全国の NGO の数は正確には分からないが、500 以上あると考えても良いだろう。その内、福岡県には、はっきりしているもので 30、それ以外の団体を含めれば 40 から 50 の NGO があるようだ。互いの活動を理解しあおうと 93 年に NGO 福岡ネットワークが発足し、現在は 17 の NGO が当ネットワークに加盟している。加盟している NGO の活動は多岐に渡る。カンボジアでの地雷問題に対する支援、フィリピンでの医療活動、タイでの里親運動、バングラデシュでの教育医療協力、ネパールでの歯科医療協力、人権問題の取り組みなど途上国を対象とした協力活動と国内での開発教育などの活動を主とする NGO がある。当ネットワークの活動は、情報の交換や資質向上のための学習会の開催など NGO 向けの活動と NGO カレッジなどの市民向けの活動を行っている。国際協力ニュースを毎月発行し、国際協力に関する新鮮な情報を提供しているほか、学校や市民センター等に講師を派遣し、国際協力や NGO についての実情を知ってもらうための活動を実施している。ネットワークとして活動することの良さとしては、社会的な信頼が得やすいこと、他種類の活動を紹介できること、各 NGO の交流が刺激を生み、自らの NGO 活動のアイデアが湧いてくることなどだろう。

●地域での開発教育 ―キャンペーン活動から―

<発表者>

寺嶋 悠 債務と貧困を考えるジュビリー九州 共同代表

<内容>

1996 年、イギリスを中心に 140 ヶ国が集まり、ジュビリー2000 キャンペーンが開始された。同キャンペーンでは途上国の債務問題に焦点をあてた。ジュビリー九州は、同キャンペーンに呼応する形で 1999 年に活動を開始した。国内外の貧困・開発問題に

ついて、特に累積債務・ODA・経済のグローバリゼーションの視点から考え、市民啓発や国内外への情報発信に取り組むと共に、積極的に海外や国内の関係団体と連携し提言活動を行っている。

現在、重債務貧困国は 41 ヶ国あり、国家予算の 4～8 割を債務の返済に充てている為、発展する上で大きな問題を抱えている。債務のせいで 1 分間に 13 人の子供が死亡しているという統計もある。

しかし、実際債務国に関心のある日本人は少ない。それをみんなに知ってもらう為に開発教育を行っている。その内容は、ゲーム（Debt Game）を通して貧困等の背景にある問題を、どう伝え、考えていくかということに取り組んでいる。海外の NGO に情報をもらい、翻訳して本を出版したり、同キャンペーンのハガキを販売するといった活動もしている。多くの問題を伝え、集中的に理解してもらうためのキャンペーン（世論喚起）も行っている。例えばケニアに援助でダム（ソンドゥー・ミリウダム）を作っても、その資金（債務）を返済できるのかという問題に対する署名キャンペーン活動をしている。また、この他ジュビリー九州は、債務や貧困などに関する記事を音楽雑誌などにも掲載して、幅広い年齢層の興味を喚起するための活動も行っている。

●福岡での NGO・自治体・JICA による連携活動の事例

<発表者>

柴田 裕子 地球市民どんたく実行委員会
(財)福岡国際交流協会 事務局長

<内容>

(財)福岡国際交流協会は 1987 年に設立され、福岡市の外部団体として国際交流や国際協力活動を支援する事業を実施している。国際協力活動では NGO・外務省・JICA と連携をしている。国際協力や NGO の活動に対して、まだまだ一般市民の関心は薄いので、NGO と市民、あるいは NGO と NGO の間に入って両者を結びつける手伝いをしている。自治体は環境整備として、場作り、情報の提供、財政・人的な支援を行うことが基本的なスタンスである。一般市民に協力活動に関心を持ってもらうこと、NGO 同士の連携を目的として、「地球市民どんたく」を実施している。基本的に NGO 主体で実行していただきたいと考えていたが、1999 年に始めた時は、NGO がどのくらい関わってくれるのか不明だったので、企画・実施の主体は協会であった。2 年目、3 年目と徐々に企画・実施の主体を NGO に移し、3 年目はほとんど NGO 主体で実施していただいた。この事業には JICA を始め外務省やハビタット等の機関の協力を得ている。お互いに連携する上で大きな力となっている。



事例発表の様子

午後：KJ法を利用したグループ別ワークショップ

<テーマ>

- ・地域おこし
- ・ネットワーク
- ・開発教育／キャンペーン
- ・地球市民どんたく（NGO・自治体・JICA の連携）

<実施方法>

- ① 上記 4 つのテーマの内、参加者それぞれが興味・関心のあるテーマごとに分かれ、グループを作る。
- ② 各グループ内で自己紹介。
- ③ 各グループが選択したテーマに関して何が必要（重要）なのかを付箋紙に 1 点のみ書く。
- ④ 各自が自分の書いた内容を説明しながらカードをグループで共有し、場に出ているカードの中から関連のあるものをまとめていく。
- ⑤ カードを模造紙に張り、タイトルを付け、全体像を確認する。
- ⑥ 各グループごとに結果を発表する。



グループ別ワークショップ

<結果>

「地域おこし」グループ

まず、地域にある資源（特色）、人が必要で、参加するきっかけ・動機も必要。楽しく興味を持って主体的に参加する為のサポートとして、情報つまり情報収集が必要になってくる。最後に発展の為には精神的なメリットが必要。

「ネットワーク」グループ

NGO ネットワークを活性化するためには何が必要かについて。情報交換→共通目的・理念→各団体の相互理解が必要で、これらを得るには NGO の交流の場や、コーディネーター（スタッフ）が必要になってくる。研修、他の活動の発展には情報収集、市民参加、インターネット、イベント情報等が必要。

「開発教育／キャンペーン」グループ

開発教育地域アプローチ計画。開発教育が必要な理由は個人の力を養い、自分自身のことを考え、自分と世界を繋げることを目指すため。そのためには、専門知識を持った人や留学生も必要。また、パンフレット等の広報用資料も文字だけでは浸透しにくいのでイラストの入ったものも必要。やはり開発教育を進める上で、学校が非常に重要ではあるが、その他にも地域に根付かせるための場も必要。

「地球市民どんたく（NGO・自治体・JICAの連携）」グループ

JICA・自治体を動かす NGO。まず、JICA 及び NGO の人材、市民を含め意識改革が必要。国際的な問題を取り上げている学校に専門家を送り人材育成をする、市民が参加して外務省・JICA・自治体を評価する、NGO が公民館等での講演なども行うべき。それらをマスコミ、行政、市民で作っていき、情報の共有化、信用の高揚、共有体験を持つこと、財務・助成金の改善、国際協会の改善などが必要になってくる。



各グループの発表

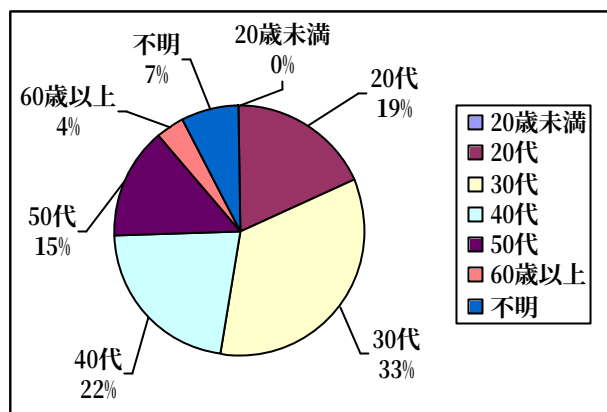
コーディネーター所感

第1分科会では、「地域で盛り上げる国際協力！」というテーマをもとに、九州地域の NGO や国際協力関係団体の支持基盤拡大をいかに進めるか、を考えた。午前中は4人のリソースパーソンから、地域おこし、NGO のネットワーク、開発教育／キャンペーン、NGO・自治体・JICA の連携の事例を紹介してもらい、協議した。午後は上記の課題別に4つのグループに分かれて、「地域で進める上で必要なこと」を KJ 法を使ったワークショップ形式で検討した。その結果、地域に根ざした継続的な活動、情報の共有、NGO・JICA・自治体間のネットワークの拡大、外務省・JICA の活動に関する評価、資金の確保などが必要であることを確認した。

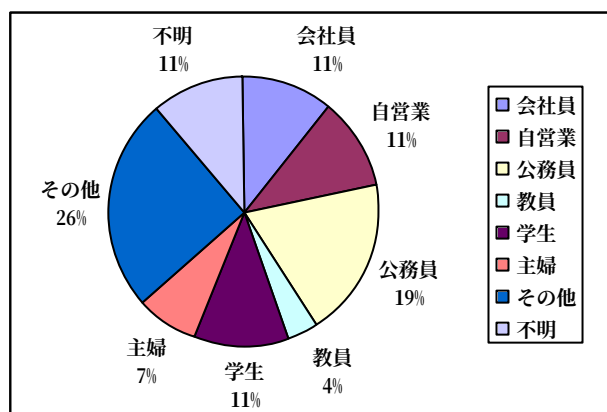
●第1分科会アンケート集計結果

Q1 参加者

年 齢	20歳未満	0
	20代	5
	30代	9
	40代	6
	50代	4
	60歳以上	1
	不明	2



職 業	会社員	3
	自営業	3
	公務員	5
	教員	1
	学生	3
	主婦	2
	その他	7
	不明	3



性別	男性	15
	女性	9
	不明	3

Q2 分科会についての感想（複数回答可）

（良い）

おもしろかった	17
わかりやすかった	3
議事進行が良かった	1
出席者がよかった	1
勉強になった	16
ネットワーク作りにつながった	4

（悪い）

つまらなかった	0
難しかった	3
勉強にならなかった	0

【ご意見・ご感想】

- ・もっと他の人と交流したい。
- ・時間が少なかった。
- ・初めてこのような会に参加しました。今回は主に他の方の意見を聴く立場だったので、次は自分の意見を発表できたらと思います。

- ・ いろいろな立場からの参加者で「ネットワーク」の捉え方が様々だったのでまとめにくかった（イメージのちがい？）。
- ・ 始まる前は長いと思っていましたが、参加してみると短いと感じました。
- ・ 午後は少し時間が足りない印象と、KJ法に関する知識が不十分で共同作業することが最初うまくいかなかった。後半とぼしてやりました。
- ・ 聞くだけでなく自ら考えることができ、また問題意識を持つことができた。

Q3 その他、気づいた点

- ・ 前半の活動紹介が長すぎる。後半のワークショップに重点を。
- ・ みなさんの情熱がとても伝わってきました。
- ・ 3つめの開発教育は、分科会4で扱ったほうがよかったのではないか。
- ・ 今回のワークショップで人とのつながりができたので活用していきたい。
- ・ ワークショップの前に情報のインプットも必要な気がしてきました。
- ・ セミナーなどの情報が得にくい。

Q4 今後もこのような国際協力に関する情報交換、ネットワーク作りの場が必要か

はい	27
いいえ	0

（どのようなイベントを期待するか）

活動分野ごとの情報交換と手法の勉強会。（計画・実施・参加・評価）

- ・ 2次会、3次会と意見交換ができるお茶会や飲み会があるとよいですね。
- ・ ワークショップ（小人数）
- ・ 小人数勉強会。
- ・ ワークショップ、体験型のもの。
- ・ 遠方の団体の方とも出会えるイベントを期待します。
- ・ 他の勉強会に参加したい。
- ・ メーリングリスト。
- ・ 連続型ワークショップ。
- ・ 開発教育コーディネーターの養成講座。
- ・ 参加型のイベント。
- ・ 団体の評価についてと人材の育成について。
- ・ 本当の意味での一般市民参加のイベント、意見交換会など。
- ・ 関心が高いと思われる話題に関する勉強会。

第2分科会

「真のパートナーシップを目指して」
～南のNGO との関係のあり方～

2002年3月3日（日） 10：30～15：00

分科会のねらい

各リソースパーソンが取り上げる事例を踏まえながら、南の NGO とのパートナーシップをどのように築きあげていくべきか、またその際に生じる問題点に対してどのように取り組んでいくべきかを考える。

コーディネーター

高柳 彰夫 JVC 九州ネットワーク 代表

リソースパーソン

三宅 可倫 元アジア農地改革農村開発 NGO 連合 インターン
原田 君子 クルンテプの会 代表
二ノ坂 保喜 バングラデシュと手をつなぐ会 代表
鎌田 靖雄 北九州市環境局環境国際協力室

参加人数

21 名

分科会内容

午前：リソースパーソンによる事例紹介

●フィリピンの NGO の多様な活動の紹介、南北 NGO のパートナーシップのあり方
＜発表者＞

三宅 可倫 元アジア農地改革農村開発 NGO 連合 インターン

＜内容＞

「南」の世界では、長引く紛争、国内産業の不足、根深く残る階級社会の弊害など様々な理由から、飢餓状況、あるいは貧困レベル以下の生活をおくる国民を多く抱えている。また対外的には莫大な債務を抱え、社会サービスが一層低下している。近年、富の分配の偏りがますます拡大し、貧困層が増えている。この状況の改善に民衆が自分たちで自分たちの生活を改善しようと取り組むわけだが、その当事者の住民組織が PO (people's organizations)、それを支援する専門の集団が NGO である。取り組む分野は農村開発、環境、保健医療、教育、コミュニティ開発等、幅広く、南の NGO の社会的立場は国により異なるものの、社会開発の担い手として重要なセクターになっている。

地域の抱える課題はその形が異なっている関連性が見られる。したがって、地域住民が南の PO・NGO を支援する際、自分らが得た生活に根ざした知識と経験を通じ

での活動が可能になる。支援する際の留意点としてはまず事前調査が必要である。現地情勢の把握、カウンターパートの選定、ニーズの調査を徹底しなければならない。

次の段階でプロジェクトを計画する。達成目標・活動内容を具体的に決定し、また活動期間を設定し、評価の準備を行なう。そして、プロジェクトの遂行である。運営における役割分担と意志決定の明確化、情報収集、コミュニケーション、評価とさらに詳細に検討していかなければならない。また現地の声として、「北のドナーは調査研究や会議開催は好むが、現地の実際の生活向上の進展や将来にはあまり興味がないように感じる」という、パートナーシップのあり方への指摘が紹介された。

●タイのプラティープ財団とのパートナーシップの経験

＜発表者＞

原田 君子 クルンテプの会 代表

＜内容＞

タイ・バンコクのスラム街で生活をしている子どもの多くは学校へ通えていない。そして、その数は増加し続けている。これらの子どもたちに奨学金を渡して学校に通う機会を与える活動を行なっている現地のプラティープ財団に、クルンテプの会は奨学金を送付している。奨学金を送る子どもを決定するために、両親を含めての面接を実施し、文房具・教科書類の為であることを説明し、そしてその子の学習意欲を見て奨学金の使途を聞いている。この面接を現地の財団が行ない、奨学金を受ける子をクルンテプの会に紹介する。クルンテプの会だけでなく、他の日本の個人、NGO にも紹介している。この活動を通して問題になるのが、現地スタッフとのコミュニケーションである。連絡事項が確実に伝えられるように、発信は FAX、メール、そして手紙の 3 重の手段が取られる場合もある。

●最近のバングラデシュの情勢と村のグループとのパートナーシップ

＜発表者＞

二ノ坂 保喜 バングラデシュと手をつなぐ会 代表

＜内容＞

バングラデシュと手をつなぐ会は主に教育と保健医療の分野で協力活動を行なっている。教育においては、小学校の建設、奨学金の付与、職業訓練を実施している。保健医療では、「母子保健センター」を建設し、治療、出産・妊婦検診、保健教育、巡回検診、および村で簡単な医療を行なうビレッジドクターとの連携を進めている。これ

らの活動は現地の NGO と連携して行なわれ、企画は現地で、資金は日本側が 100% 負担している。

現地 NGO との関係という視点からの課題としては、日本側と現地の理念の共有、深め合いが不足していること、現地の文化背景や政治情勢の的確・迅速な把握が困難であること、プロジェクト実施の優先順位の決定の基準・方法が不明確であることなどがあげられ、その結果本当に「村人の自立」につながる活動となっているのか、という大きな課題を抱えている。

相対的に社会的役割が大きい南の NGO と、先進国日本の NGO とどのような関係を結んでいくのか、今後とも大きな課題である。

●自治体による南の NGO とのパートナーシップの模索

<発表者>

鎌田 靖雄 北九州市環境局環境国際協力室

<内容>

北九州市は国際的に環境協力を推進している自治体の一つである。1960 年代の公害のひどい状況から産学官民が一体となって努力を重ねた結果、環境は改善された。

この技術と経験を他国に伝えるべく、その効果的な方法の一つとして南の NGO とのパートナーシップを模索している。具体的には、フィリピン・メトロセブ地域の環境改善を図るため、従来の行政中心による技術協力に加え、北九州グリーンユースとフィリピンの NGO である CLEAR との交流を通じた、市民レベルでの協力にも取り組んでいる。



事例発表の様子

午後：グループ別ワークショップ

午前中にリソースパーソンが挙げた事例から提起された課題ごとにグループに分かれ、リソースパーソンを中心にグループトークを行ない、各グループごとに話し合いの結果を発表した。短い時間のなかで、各グループ内では参加者一人一人から多くの意見、疑問、提案等が出てきて、非常に活発な意見交換が行なわれた。各グループのテーマと内容は下記のとおり。

○第1グループ：活動をどう進めていくか？－出会いから協力へ－

カウンターパートとの出会いがあってから、何かしらの協力が開始されるが、その出会いは様々である。出会ったカウンターパートと理念を明確にし、どの程度までそれを共有できるかがカウンターパートとの関係を築く上で非常に重要である。そのためには現地の人々との間に十分な対話の機会を持ち、意見の相違があることを知る必要がある。対話の機会を持つことで、現地の人々が抱える問題を現地の人と一緒に考えることが可能である。したがって、NGOの活動が現地の人に理解されるように努め、理解されるものでなければ、彼らの持つ力を引き出すこと（エンパワメント）は困難である。

○第2グループ：実際にプロジェクトを進めるときの課題

実際にプロジェクトを行なう際に、コミュニケーションは大きな課題となる。現地のニーズを知ることはもちろん、刻々と変化し続ける現地の状況を把握しなければならないからである。単にその地域の言語が理解できれば十分ということではなく、生活習慣・文化・宗教・歴史・価値観などもコミュニケーションの方法に大きな影響を与えている。

したがって、現地の人々のやり方を尊重し、その上で自分たちのやり方も理解してもらえるように、両者間に「共有と許容」ができる信頼関係を築き上げていくことが重要である。

○第3グループ：プロジェクトの継続性

プロジェクト策定において、そのプロジェクトは期限付きか、それとも無期限で行なうのかといった期間の決定は重要事項の一つである。なぜなら、長期のプロジェクトを行なうと現地の人々が依存する傾向があるためである。自立と依存のバランスを考慮したうえで、なぜ援助をしているのかについての理念を理解してもらい、十分な事前調査で現地のニーズを把握すること、そしてプロジェクト終了後に評価を行うことが必要である。

コーディネーター所感

第2分科会は、南のパートナーNGO との関係のあり方をテーマにした。午前中は4人のリソースパーソンからそれぞれの経験をもとに問題提起していただいた。午後は、「出会いをどう活動につなげていくか」「活動を続けていく上での課題」「活動をどう持続させていくか」の3つのテーマに分かれてグループディスカッションを行った。ややあわただしい分科会だったが、パートナーとの相互理解やコミュニケーションをどう進めていくのかという NGO、JICA、自治体共通の課題について意見交換ができ有意義だった。



グループトーク

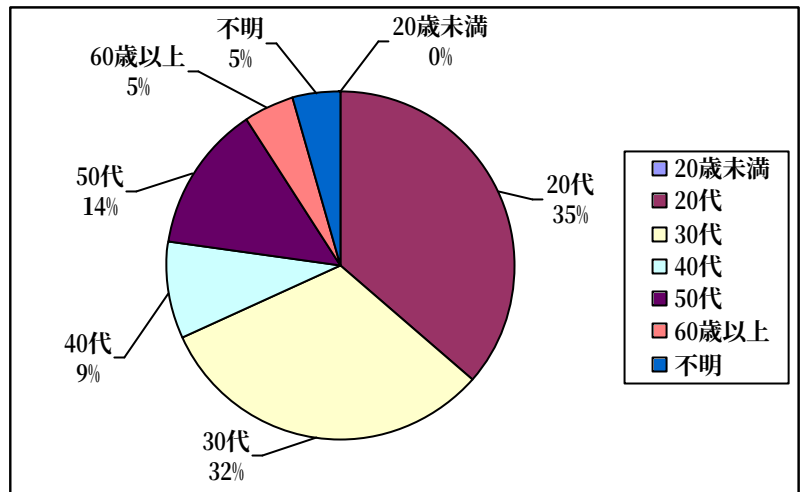


各グループの発表

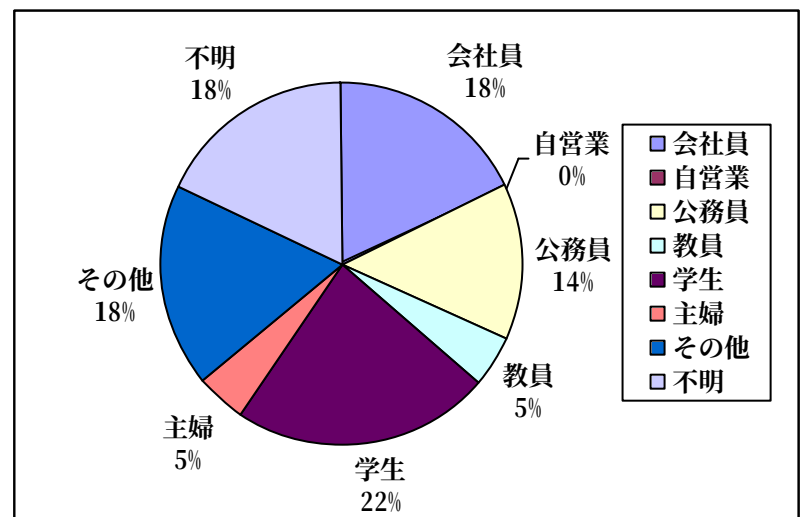
●第2分科会アンケート集計結果

Q1 参加者

年 齢	20歳未満	0
	20代	8
	30代	7
	40代	2
	50代	3
	60歳以上	1
	不明	1



職 業	会社員	4
	自営業	0
	公務員	3
	教員	1
	学生	5
	主婦	1
	その他	4
	不明	4



性別	男性	9
	女性	11
	不明	2

Q2 分科会についての感想（複数回答可）

(良い)	
おもしろかった	8
わかりやすかった	5
議事進行が良かった	0
出席者がよかった	1
勉強になった	18
ネットワーク作りにつながった	2

(悪い)	
つまらなかった	0
難しかった	3
勉強にならなかった	0

【ご意見・ご感想】

- ・活動初心者の参加が少なかった。朝日新聞だけで知りましたので分科会の内容が詳しく分かっていなかった。
- ・今回が初めての参加でしたので知識不足でしたが、現状をわかりやすく説明してもらい大変勉強になりました。
- ・NGO活動を継続する難しさを改めて感じた。

- ・問題提起に終わってしまい、その解決方法は理解できなかった。
- ・いろいろな人の意見が聞けて良かったです。
- ・それぞれのリソースパーソンのお話もし唆的でしたし、後半のディスカッションもいくつかの基本的な問題が確認されて良かったです。しかし話し合いの時間はやや不足で十分にまとめができませんでした。
- ・NGOの活動や、関わる人の考え方、思想を聞くことができて勉強になりました。自らの見解を深めるためにも良い機会でした。
- ・自分の知識のなさに気づきました。とても難しいディスカッションや深く追求していくことにより勉強になりました。
- ・事例報告の時間はもう少し短くてもいいと思います。その分、参加者の意見交換の時間にあてた方がいいと思った。
- ・国際協力、活動を通して感じたことは相手国を知る（言葉・文化・習慣など）ことがお互いの信頼関係を築き長期活動となる。

Q3 その他、気づいた点

- ・今回の分科会が分野別だったので幅広く聞きたかった私には少し専門的すぎた気がします。今後もこのような活動に参加していきたいです。
- ・もっと時間が欲しかった。
- ・NGOメンバーのミクロレベルのお話が大変興味深かった。
- ・一人一人がいろいろな意見をもっていて、とても参考になった。それと同時に自分を見直す機会になったと思う。
- ・今までにない分科会で勉強になりました。

Q4 今後もこのような国際協力に関する情報交換、ネットワーク作りの場が必要か

はい	22
いいえ	0

（どのようなイベントを期待するか）

- ・国際協力など。
- ・NGOの活動が広いことを今回知りました。県・地域レベルでも、活動分野を区別しない全体の報告会、ワークショップを期待します。
- ・第2回NGO－JICA合同ワークショップ。
- ・NGO活動をもっと一般の方へ知らせてほしい。
- ・情報交換の場。
- ・このような形の方が親しく話せるので良いがもっと他の分科会も聞きたかったので時間をずらしてほしかったです。
- ・南のNGOとの交流会などを望みます。
- ・いろいろな人の声を聞けるようなものがやはり良いかと思います。
- ・話しやすいパーティーなどをする。

- ・NGO間の活動実態を相互に評価・検討する場。
- ・現地活動を行っている方の講演と参加者による討論会。
- ・現地の人からの意見、在日外国人からの意見。

第3分科会

「農村開発」

～地域の結びつきで知恵を生かす～

2002年3月3日（日） 10：30～15：00

分科会のねらい

- (1) 九州の特徴を生かした農村開発協力活動の事例を共有する。
- (2) 「農村開発」の目指すものについての議論を深める。
- (3) 国際協力活動が私たち自身の社会に及ぼす効果について考える。

コーディネーター

西嶋 克司 (特活) 明日のカンボジアを考える会 事務局長

リソースパーソン

木村 浩純 (特活) 地球緑化の会 事務局次長

今村 真 タイとの交流の会 (谷口プロジェクト) 事務局長

八尋 幸隆 (特活) 明日のカンボジアを考える会 理事

参加人数

21 名

分科会内容

午前：リソースパーソンによる事例紹介

●アグロフォレストリーに取り組む動機、内容、意義

<発表者>

木村 浩純 (特活) 地球緑化の会 事務局次長

<内容>

アグロフォレストリーは乾燥地で有効な農業の方法であり、植林と畑作を複合したものである。活動を始めるまでに1～2年かけて村人と身の回りの問題点についての対話を重ねた。薪拾いの話から近くに林があれば良いということになり、モデル農場を開設した。植林では浅植えと害虫のシロアリとの共生を目指した。シロアリは生態系からみれば分解者であり、植林後の根元に間伐した枝などを敷き詰め餌にする方法で成功している。当初は自分の村で実践する人は1割そこそこだったが、現在では自分で育苗場を作る人に加え自主植林グループが6つ誕生するまでになった。長い植民地時代にいろいろな技術が入る一方で人々に依存的な姿勢が生まれていた地域だったので評価できる動きである。

また、播種後稲藁を敷くマルチ稲作に取り組んでいる。地温抑制、雑草抑制、肥料効果が得られ、成果を上げている。

●農場開設から地域の自立を支える「5 本柱」の活動に至る経緯

<発表者>

今村 真 タイとの交流の会（谷口プロジェクト） 事務局長

<内容>

谷口巳三郎氏がタイに渡ったのは、将来の食料不足の時に日本が助けてもらえるのはアジアの国々であるとの思いからである。タイ北部のパヤオ県で谷口さんが経営している 21 世紀農場は現在 25 ヘクタール。地元の高校生を 1 年間研修させるなど地域で青少年教育、開発アドバイザーとしての役割を果たしている。タイとの交流の会の活動の 5 本柱は以下の通り。

- (1) 谷口農場支援：21 世紀農場では「循環」を基本にしている。竹炭による土壌改良、ニワトリの糞を餌にした養魚、豚の糞を肥料とするなど。
- (2) ミシンプロジェクト：女性の自立を支援し売春・エイズ防止にもつながる。
- (3) 奨学金里親制度：現在日本人の里親 580 人が 1,300 人の里子に奨学金を送っている。
- (4) 果樹の森：高地民族の土地所有権維持と収入確保のために寄付者の名をつけた苗木を植えているが、資金が不足しており苗木の枯死も多い。
- (5) エイズの人々に光を：エイズの人々を支援し地域で見守る。

当会の特徴はお金や品物を谷口氏自身が責任をもって使用することである。また人材教育こそすべての基本と考えている。

●試験農場での活動を中心としたコミュニティの結びつき醸成

<発表者>

八尋 幸隆 (特活) 明日のカンボジアを考える会 理事

<内容>

(始めに明日のカンボジアを考える会が支援するカンボジア・バタンバン州での試験農場プロジェクトの枠組みについて事務局長の西嶋克司氏から説明があった。小額資金貸付と農業、保健、福祉を組み合わせた統合的地域開発プログラムを実施するのは「るしな・こみゆにけーしょん・やぼねしあ(松本清嗣代表)」で、会の役割は農場運営の資金援助と技術協力。八尋氏は農業専門家として定期的に現地を訪問している。)

試験農場でのポイントは第1に「循環型農場」をどうすれば具体化できるか、第2に稲だけでなく食用の魚や貝や水草も生きている田んぼの恵みを生かすことである。私は指導するのではなく自分ならこうすると提案する姿勢で接している。なぜなら地元

の人々こそ問題に対処する知恵を持っているはずで、内戦で崩れた伝承や自信を取り戻すきっかけになればそれで良い。

具体的には土作りを重視してきた。外から持ち込むのではなくその場にできるもので土を肥やすことが大切で、藁の土への還元、土を直射日光にさらさないために乾季も植物で被うなどしている。稲については周囲の田んぼの約 1.5～2 倍の収量を得られるようになった。野菜はまだまだ手探りで、豚の飼育もこれから工夫すべきことが多い。



事例発表の様子

午後：参加者を含めたディスカッション

<内容>

午後のディスカッションは参加者全員が一つの輪になり、午前中の発表に対する質問票にリソースパーソンが答えることから始まった。まず話題になったのは技術協力の問題だった。日本で開発された地下貯水システムがカンボジア等で使えないかとの提案をきっかけに NGO で活動する人、JICA 専門家など様々な立場から体験談や意見が出された。乾季に貴重な雨水の貯水のために現地で調達できる材料を用いて設置することは良いのではないかと、日本人が考えたコンクリートの地下貯水槽は水が腐ったが地元の人を使う水瓶では腐らない、地下水を汲み上げるポンプが盗まれた等々。さらにラオスでの JICA およびカンボジアでの NGO の活動において、日本の精米機を導入するのではなく性能は劣っても地域の人が自分達で調達できる機械を選んだところメンテナンスもうまくいっているという同じ経験が紹介された。

技術の話は、ラオスで JICA が行う紙漉きによる農村開発の紹介から日本の伝統技術の活用に及んだ。そこから更に地域開発におけるマーケティングが話題となった。「近

代化幻想」によって伝統的な色やデザインのものを作ろうとしないというラオスでの話は参加者の関心を呼んだ。自給自足で事足りるわけではないので、収入確保を考えることも地域開発には重要な課題であるとの認識で一致した。開発協力ではお互いに学び合うことがあるという話題に沿って、マレーシアから福岡に農業研修に来ている人の発言もあった。

最後に「いつまで支援・投入を続けるのか」「ODA と NGO はどう違うのか」という質問を契機に、地域の人々自身の力による経済的、社会的自立をゴールとして開発協力計画が策定される必要があること、NGO と政府の役割は得意分野で補完し合う場合と前向きな緊張関係を持つ場合があることなど開発協力の核心について話されたのは有意義であった。



ディスカッション

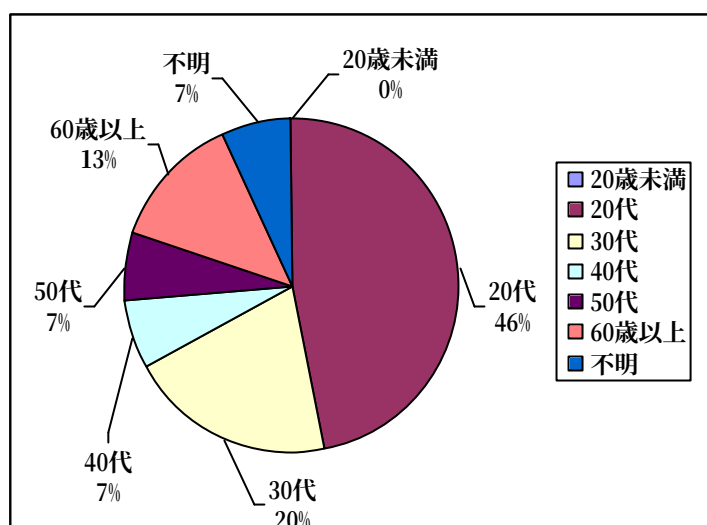
コーディネーター所感

ディスカッションではNGO 関係者や JICA 専門家等から技術協力についての考え方やすぐに役立ちそうな経験が話され、良い意見交換ができた。一方で、若い人からの「JICA と NGO の違いは?」「いつまで支援を続けるのか?」という率直な問いかけが、開発協力の本質をつく議論を切り開くという鮮やかな局面もあった。

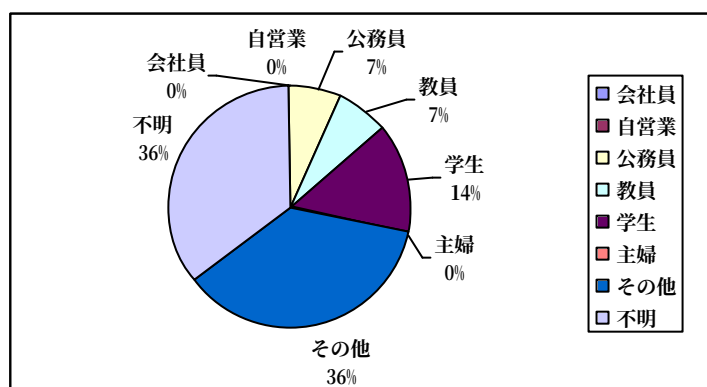
●第3分科会アンケート集計結果

Q1 参加者

年齢	20歳未満	0
	20代	7
	30代	3
	40代	1
	50代	1
	60歳以上	2
	不明	1



職業	会社員	0
	自営業	0
	公務員	1
	教員	1
	学生	2
	主婦	0
	その他	5
	不明	5



性別	男性	8
	女性	6
	不明	0

Q2 分科会についての感想（複数回答可）

（良い）

おもしろかった	6
わかりやすかった	2
議事進行が良かった	5
出席者がよかった	4
勉強になった	10
ネットワーク作りにつながった	1

（悪い）

つまらなかった	1
難しかった	2
勉強にならなかった	0

【ご意見・ご感想】

- ・各会の活動内容についてもう少し深く知りたかったです。特に谷口プロジェクト。
- ・参加者の方が海外協力の経験をされてきておられる方が多く、その方々から直にお話を聞かせていただく貴重な体験をさせていただきました。どうもありがとうございました。

- ・現在私は就職活動しており、自分の進路を迷っていたため、この分科会に参加することで何か得られるのではと思ってきました。新たな世界を知ることができ、今後の生き方を学んだ気がしました。
- ・専門ではないが出席してみたくて来ました。ハイペースの意見交換についていけなかった。僕としては現地の人の意見や姿が具体的に見えた方がおもしろかったと思う。しかし、行き詰まりや試行錯誤のたえない努力が見え、大切な何かを見落としているのではないかという不安もあったが、きっと新しい何かは絶えず生まれていると安心しました。
- ・各団体の具体的な取り組みが伺えて大変参考になった。
- ・技術協力関係の話が少し詳細で難しかったのですが、皆さんコミットメントを持って活動しておられ、励みになりました。
- ・今回は農業という分野でのワークショップに参加したが、必ずしもそれだけでは解決できないことを痛切に感じた。

Q3 その他、気づいた点

- ・円になって話せたことはよかったです。
- ・JICAもNGOも似たところがあるということ。マーケティングの問題etc.
- ・他の分科会にも参加したかったです。

Q4 今後もこのような国際協力に関する情報交換、ネットワーク作りの場が必要か

はい	14
いいえ	0

(どのようなイベントを期待するか)

- ・小人数で意見交換ができればいいですね。
- ・このような分科会の開催情報を何らかの形でもっと公開してほしいです。
- ・専門家同士ならそのみの会、素人ならばそれ用のものがあればいい。
- ・1日ではなく数日にわたってほしい。もっと話が聞きたいです。
- ・ワークショップ、情報ネットワークづくり。
- ・テーマを分野横断的にして（例えば貧困、ジェンダー）このような分科会を開くといいかもしれないですね。
- ・NGO同士の意見交換の場、NGOとJICA/ODAとの意見交換の場。

第4分科会

「明日を拓く子どもたち」
～教育と子ども、その可能性について～

2002年3月3日（日） 10：30～15：00

分科会のねらい

海外での現状や子ども同士の交流活動などのリソースパーソンの活動事例を通して、「自らの可能性を拓く」という教育の原点に立ち戻り、参加者それぞれが自らへ主体的に問いかける場とすること。

コーディネーター

山下 亜樹 国際協力事業団九州国際センター 国際協力推進員

リソースパーソン

勝井 裕美 シャプラニール＝市民による海外協力の会
大神 のりえ インド国際子ども村「ハッピーバリー」 代表
吉野 あかね 地球共育の会・ふくおか 代表
池水 佐千子 元青年海外協力隊（コスタリカ・小学校教諭）
宮崎大学大学院修士課程教育学専攻

参加人数

43 名

分科会内容

午前：リソースパーソンによる事例紹介

●世界の子どもの現状とそれに対する支援活動について

<発表者>

勝井 裕美 シャプラニール＝市民による海外協力の会

<内容>

シャプラニールが教育関係の援助を行ったきっかけは、バングラデシュの活動で、子どもたちに物をあげてもそれを売ってその日食べるものを買ってしまうことから、お金を積み立てて、教育も含めた将来に役立つ資金にしてもらおうというものだった。学校に入学しても、家の仕事を手伝う必要があったり、勉強が難しい等の理由により、進級試験に落ち中途退学する例が多い。政府は、女子の小学校入学を無料にしている。

バングラデシュでは、都市化の過程で出てくるストリート・チルドレン支援を行っている。ストリート・チルドレンには、Children on the Street（路上や公共の場所で働いている子ども）と Children of the Street（帰る家がなく、路上でずっと生活している子ども）の2種類がある。両親の離婚・再婚で家に子どもの居場所がなく自分で家を

出てくる例が多い。現在では「オポロジェヨ（絶対負けない）」という名の現地 NGO が青空学級を行ったり、台所を備えたセンターを用意している。彼らは“かわいそうで保護してあげなければならない存在”ではない。本人の「生きる力」を伸してやるしかない。彼らは“大人への不信感”が強いので、仕事と心のケアとの両立が重要となるが、まだ充分ではない。

○発表者に対する質問

子どもが出て行ったあと親は捜さないのか（答：捜す手立てがほとんどない）、行政は何もやらないのか（答：行われていない）、女子が売春をやっているなんて…など、多くの質問・意見が出た。

●子ども同士の交流とその可能性について

<発表者>

大神 のりえ インド国際子ども村「ハッピーバリー」 代表

<内容>

ハッピーバリーでは、インドと日本の小学生の交流活動を行っている。大神さんは、大学で児童学を専攻後、宮崎の延岡でユネスコの活動に従事されていた。ユネスコの憲章の前文には、「戦争は人の心の中に生まれるものだから、人の心に世界の平和の砦を築かなければならない」という部分があり、そこから「世界中の子どもが仲良くなればいい!」という発想を得て、1987 年からこの活動を始めた。毎年1つの国と交流を行い、200 年続ければ200 ヶ国できると考えたが、実際は10 年間で4 カ国しかできなかった。

交流合宿では、行く日と帰る日を決めるだけで、内容は決めず、子どもたちに決めさせる。既に参加した子が、次に参加する子に対して研修するという形式をとっている。参加することは一つのきっかけであり、帰ってきてから、本当に成果が出てくる活動だと考えている。

ハッピーバリーの交流活動で一番大切なのは「子どもの主体的な思いを尊重し、したいことを自らがやる」ことを徹底していること。どんなにそれが意味のあることでも子ども自身がそうしたいと思わないことは一切しない。あくまでも、自らが「そうしたい」と思うことが大切で、そういう経験を積んだ子どもであれば、必ずその経験を次へと生かすことができる。実際に、交流合宿を体験した子どもの何人かは、九州の NGO スタッフになったり、次の参加者を育てる活動をしたりと、それぞれ確実に成長している。

●青年海外協力隊での活動と現在の問題意識について

＜発表者＞

池水 佐千子 元青年海外協力隊（コスタリカ・小学校教諭）

宮崎大学大学院修士課程教育学専攻

＜内容＞

現職小学校教員である池水さんは、ご自身の就職活動や青年海外協力隊に参加したきっかけ、教諭になることなどの経験談を通して、「教育って一体何？」という問題を提起した。

自分は真面目に勉強しながらも、ずっと「なぜ勉強しなければならないのか？」という問いを持っていた。大学も宮崎で、外に出たことがなかった。しかし、姉が青年海外協力隊に参加した時にホンジュラスに会いに行ったことをきっかけに開眼し、自分も教員採用試験を受ける前に青年海外協力隊に応募し、コスタリカで手芸を教えることになった。

帰ってきて日本の小学校の教諭になり、今考えることは、「日本の子どもは心のストリート・チルドレンになっているのでは。漂っていて居場所がない」ということである。日本は「どうして勉強しなくてはならないのか」という問いに答えられない国である。留学生から見ても、「日本では子どもを育てられない」と思われている（新聞記事を参考に）。日本の公教育は、①国力のためと考えられ、大きな母集団に対し公平さが求められているが、一方で、②階層の高い人と低い人という階層間格差を生み出している、という矛盾がある。現在の教育システムは、ヨーロッパの良い階級の男の人の育て方がお手本となっているが、実際は学力が高く国が望むポジションにつくのはほんの一握りの人のみで、残りの多数派の人たちのためになっていない。

最後に、現在大学院で勉強されている今の池水さんなら、「どうして勉強しなければならないのか」という問いにどう答えますか、という質問があったが、「もし言えとしたら、好きだからと言いたい。今の子どもたちにも自分の好きなことを胸を張って応えて欲しい」とのことであった。



事例発表の様子

午後：自己紹介ワークショップとディスカッション

午後は、最初に、吉野あかね氏による自己紹介ゲーム（一対一で自己紹介カードを見せ合いながら1分半ずつ話す）が行われた。

その後、昼休みに張り出してもらっていた各自の「分科会に対する期待・関心事」を分類したものに基きディスカッションが行われた。その分類は、次の通り。

- (1) 世界の子どもたちと私たち「何ができる？」多文化共生・コミュニケーション
- (2) 教育支援のあり方
- (3) NGOへの関わり方
- (4) 「教育」って何？
- (5) 子どもたちへの伝え方
- (6) その他、今の思いなど

参加者が多かったため、全体で進めるか、グループに分かれて進めるかが問題となったが、多くの方の意見が聞きたいということで、全体での進行となった。

子どもの性的搾取の話題にはじまり、日本の「性教育」についてや、日本人の買春ツアーについても意見が出た。これらは最終的に「人権」の問題であり、我が国の教育についても、人権について考えることのできる人間を育てる教育でなければならないはずである。

そこから「教育」って一体何？という次のテーマに移った。教育とは「自分探し」ではないか（大学生より）、なぜ勉強するの？という問いが子どもから出たらどうしてそう思うかを本人に問い掛けてあげることが必要では（小学校教諭より）、今の高校生に途上国問題や人権についての認識をどう教えていくのか（高校教員より）、「学ぶ」にはサンスクリット語で「心の奥から出てくるもの」という意味がある（大神氏）、など、多くの意見交換がなされた。またユニセフ協会のスタッフの方からは活動内容の紹介があった。

結局、ストリート・チルドレンは良くも悪くも「自分の人生」を生きているのに、日本の子どもたちは受身で、自分の人生を生きていないし、地域の中で生きていないのではないかと吉野氏からコメントがあった。

大切なのは「伝え方」ではないか。現在、総合学習の時間でどのように教えたらいかが課題となっている。ある NGO の例では、劇で伝えるということを行っている。その NGO スタッフからは、学ぶということは「選択肢が増える」ことつまり「自由」であると考えるが、今の教育では「評価」をされるから子どもが意見を言えない状況があり、この方式では子どもたちが自信を持てないことになる、という意見が出された。

教育とは“feed（えさを与える）”、つまり“feed back（噛み砕いて返す）”する営みである、という紹介もあった。



ディスカッションの様子

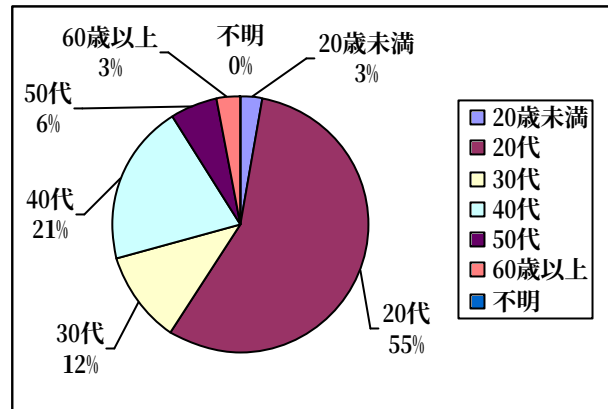
コーディネーター所感

会場からあふれるほどの人と熱気で、コーディネーターが何も言わずとも、次々と手が挙がり、とても時間が足りないほどの盛り上がりだった。ディスカッションでは「なぜ学ぶの?」と「子ども（あるいは周囲の人）に何をどう伝えていくのか?」ということが大きなテーマとなったが、「学ぶ」ということに改めて足を留めて、その意味を自らに問いかけ、あるいは人の意見に心を揺さぶられながら、最終的には分科会の4時間半そのものがまさに自分自身の「学び」の時間になったのではないかと思う。

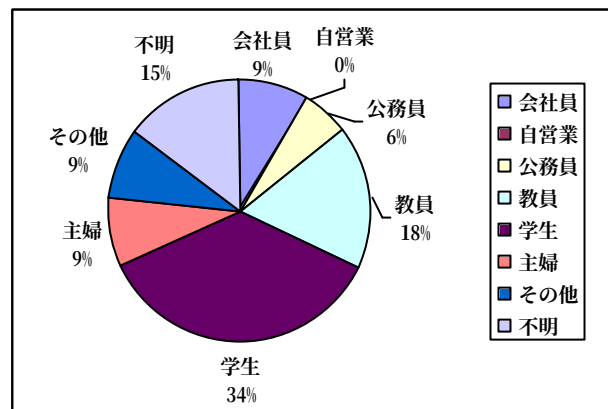
●第4分科会アンケート集計結果

Q1 参加者

年 齢	20歳未満	1
	20代	19
	30代	4
	40代	7
	50代	2
	60歳以上	1
	不明	0



職 業	会社員	3
	自営業	0
	公務員	2
	教員	6
	学生	12
	主婦	3
	その他	3
	不明	5



性 別	男性	3
	女性	31
	不明	0

Q2 分科会についての感想（複数回答可）

（良い）

おもしろかった	30
わかりやすかった	11
議事進行が良かった	23
出席者がよかった	16
勉強になった	28
ネットワーク作りにつながった	6

（悪い）

つまらなかった	0
難しかった	1
勉強にならなかった	0

【ご意見・ご感想】

- ・ 焦点が定まりにくかった。
- ・ 様々な経験を持つ方の意見を聞くことができ、刺激になりました。
- ・ みなさんの熱気に圧倒され、いろいろと自分自身を問い直す場となりました。
- ・ 本当に来て良かったと思います。また一つ自分の視野が広がりました。

- ・今日は教育のあり方や学びについて話し合いましたが、本当に私自身が楽しく学ぶことができました。今日学んだことをもっと多くの人に伝えたいです。
- ・いろいろな意見が聞けてよかった。自分も何かNGO活動をしたいと思う。
- ・「そーよね」ということ、「そういえばそーよね」と気づかされることが山盛りでした。もっと時間があってもいいくらい。
- ・分科会の中でも意見がでましたが、テーマが教育だったので今教育のまっただなかにある子ども達も呼んだ方がよかった。
- ・とても興味深くあつという間におわったという感じです。もっとじっくりお話を聞きたかったです。またこういう機会があれば是非参加したいです。
- ・思いっきりいい刺激になりました。手を伸ばしてできることからはじめていたら。自信をもって行動することを肝に命じて。
- ・いろいろな人の意見が聞けてよかった。教えられるというよりまさに心を聞く、感じるよい時間でした。
- ・新しい視点を発見しました。ありがとうございました。
- ・いろいろな人の意見を聞くのはすごく楽しかったです。

Q3 その他、気づいた点

- ・ワークショップをもっと取り入れてほしい。
- ・すごく勉強になりました。
- ・お世話頂いた方ありがとうございました。
- ・子どもも参加できるといいですね。
- ・人数が多くてももちろん良かった点もあるのですが、自分の性格上発言できなかった。どうしたらいいんでしょう？
- ・会議のように席を並べてというのではなく、気軽に話せて良かったと思います。

Q4 今後もこのような国際協力に関する情報交換、ネットワーク作りの場が必要か

はい	33
いいえ	0

(どのようなイベントを期待するか)

- ・今回のように他団体、異業種の人たちが話し合える場、イベント。
- ・NGOで活動されているワークショップ。
- ・もう少し細分化してほしい。
- ・世界の子どもたちに関係するイベント。
- ・子どもも参加。
- ・またこのようなものを。他の分科会の内容も気になるので。
- ・学校に行って子どもたちと考えるなど。
- ・今日のようなイベント。
- ・様々な世代、職業などのバックグラウンドを持つ人たちと活発に意見交換できる場。

- ・またこのような会を続けてください。
- ・様々な国の人々や年を問わずに参加し、話し合える場。
- ・それぞれが抱えている問題点・不安とそれにどう取り組んでいるかをシェアできたらいいな。
- ・根本「〇〇とは？」に関する意見交換。
- ・多文化教育についてetc。
- ・意見交換の場。
- ・会議室を抜け出し、自然の中で触れ合えるようなこと。

第5分科会

「環境に国境はない！」

～効果的な環境協力のためのよりよい連携を目指して～

2002年3月3日（日）10：30～15：00

分科会のねらい

- (1) 途上国で必要とされている環境協力について、意見交換を行う。
- (2) 各援助リソース間の情報共有及び効果的な連携方法について意見交換を行う。

コーディネーター

今井 千郎 国際協力事業団 国際協力専門員

リソースパーソン

芥川 仁 アジア砒素ネットワーク 事務局長
対馬 幸枝 アジア砒素ネットワーク ダッカ事務所長
緒方 卓也 水俣市環境福祉部環境対策課
柳井 真結子 北九州グリーンユース

参加人数

22 名

分科会内容

午前：リソースパーソンによる事例紹介

●NGO による途上国での活動事例及び NGO と JICA の連携

<発表者>

芥川 仁 アジア砒素ネットワーク 事務局長
対馬 幸枝 アジア砒素ネットワーク ダッカ事務所長

<内容>

○活動内容

アジア砒素ネットワークはもともと宮崎県高千穂町の土呂久鉾害被害者支援運動を行ってきた市民が中心となっており、この経験を活かし国外での砒素汚染地域住民の救援活動を行っている。現在は、主にバングラデシュの砒素汚染に対する住民レベルでの支援を行っており、ダッカ及び地方部にアジア砒素ネットワークの事務所を置いて活動している。

○JICA との連携事例

(1) 地域提案型事業

JICA と協力し、2001 年 11 月から 12 月までの約 2 ヶ月間、バングラデシュ、タイ、中国、内モンゴルから研修員を受け入れ、「地域住民の健康保全のための砒素汚染対策指導者育成セミナー」を開催した。研修員からは高い評価を得たが、ディスカッション

の機会が少なかったとの反省点もあった。

(2) 開発パートナー事業

JICA と協力し、2002 年 1 月から 3 年間、バングラデシュにおける砒素汚染に対する地域レベルの支援を行っている。バングラデシュにおいては、1993 年に井戸水から砒素が見つかり、現在では全土の 90%以上の井戸水が、許容値を超える濃度の砒素に汚染されているとの報告がある。また、砒素により、地域住民が皮膚ガンになるケースも見られる。実際に井戸水を飲んだ住民の間で砒素中毒の症状が多発している。現在、井戸水の実態調査、浄化槽の普及、汚染地図の作成などを行っている。

●自治体の環境協力の事例及び自治体と JICA の連携

<発表者>

緒方 卓也 水俣市環境福祉部環境対策課

<内容>

水俣病は健康被害のみならず地域社会にも大きな影響を与え、町は疲弊した。しかし、市民のほとんどが加害者である企業に依存して生活していたため、患者をかわいそうだと思いながらも、水俣病について語ることもなく、十分な手立てもなかった。

平成の時代になってやっと、水俣市はこの水俣をどのように再生すべきかを考えるため、環境創造みなまた推進事業をスタートする。まずは、それぞれの立場の人がお互いの垣根を低くして語り合うことから始めた。そして、水俣病について正面から話し合うために、地区毎に懇談会やワークショップを開催し、水俣の環境を地域一体となって取り戻す努力をしていくよう推進していった。この「水俣病」という呼び名は、水俣市民に対する偏見をも生み、名前の変更を求める要望も多く出ていたが、逆に水俣という知名度は世界的にもブランドになったため、この「負」のイメージを環境再生に成功した町として、「プラスの資産」へと変えていこうという意見も出てきた。

水俣市は「環境モデル都市づくり」宣言を 1992 年に行い、住民協働での町づくりとして、「もやい直し」を進めていった。もやい直しとは、絡まった綱を元通りにつなげるという意味からとったものである。市（行政側）としては、行政、市民、企業の話し合う場などの会議場確保や、方向性確認のための議事録作成、責任の明確化、また必要であれば市長や議長にも出席してもらう、などの事務局支援を行った。あくまでも「住民が主役」であるため、行政が住民のサポート的立場となる「行政参加型」という形をとった。行政側がどんなにルールを定めていったとしても、それは継続することは難しく、住民自身にこれからの水俣について考えてもらうことが必要であると考えたためである。

そんな中、市民の中から自発的に環境に関する団体が出てきた。例えば「ごみ減量女性連絡会議」や「寄る会みなまた」等である。ごみ減量女性連絡会議では、スーパーマ

ーケットでの食品トレーを廃止する働きを行い、結果として大型スーパー4店で78品目の食品トレー廃止協定を結ぶことができた。

住民に浸透したこのような活動は、外部から表彰を受け、活動自体が活性化していった。ISO14001を基に、家庭版ISO、学校版環境ISO、保育園・幼稚園版環境ISO、旅館・ホテル版環境ISO等のシステムをつくり、水俣市独自の環境にいい取り組みも始めた。更に、2年前からはJICAの研修員受入や、国内外において水俣病経験を普及する会議にも出席している。

●学生団体による活動事例

<発表者>

柳井 真結子 北九州グリーンユース

<内容>

北九州グリーンユースは、北九州市内の学生による研究会として2000年に発足した。研究会の正式名称は「北九州市環境国際人材若者研究会」といい、目的は国際社会で活躍できる環境人材を育成することである。主な活動としては、グローバルアジアフォーラム等の国際会議や環境イベントにおいて、若者としての意見の発表、フィリピンのセブで活動しているCLEAR YOUTHとの交流がある。これらの活動においては、北九州市の全面的な支援を得ている。

グリーンユースの活動の目的は、「学ぶ」ことにある。しかし同時に、若者だからできる国際協力があるとの信念のもとに、「援助」ではない国際協力の方法を模索している。



事例発表の様子

午後：参加者を含めたディスカッション

参加者一人一人による自己紹介の後、下記のテーマに関して意見交換を行った。参加者はNGO 関係者、大学教員、大学生、高校生、JICA 関係者、企業関係者等多様であったために、様々な視点からの意見が出た。

<現地との関係>

- ・インドネシアでは、環境問題は貧困からきている場合が多い。根本的な原因となる生活様式の部分から考えていく必要がある。ただし、先進国の価値観の押し付けが一番の問題であるということが今まで散々言われてきた。プロジェクトが実施されても、途上国では違和感を感じたり、プロジェクト終了後、自分達では活かしきれないということが生じることもある。DAC でもパートナーシップを意識することが重要視されているが、途上国をパートナーとして環境問題に取り組むことが必要である。
- ・現地の人々が環境問題に積極的に取り組むようにするためには、現地の NGO を取り込むことが重要。時として NGO だからこそ本当に必要な調査や援助ができることがある。

<バングラデシュの砒素汚染>

- ・はっきりとした原因は出ていないが、様々な要因を突き詰めて考えていくと貧困の問題に行きつくようである。
- ・現地で活動するためには「業に入っては業に従え」でいくべきだと思う。日本人から見て、現地の文化や習慣が理不尽にみえても、まずそれを認めてその上でお互いの関係をつくっていくべきである。JICA は時間をかけて信頼関係を練り上げるというプロセスと話し合いをしっかりと行い、ニーズを把握することが必要だと思う。

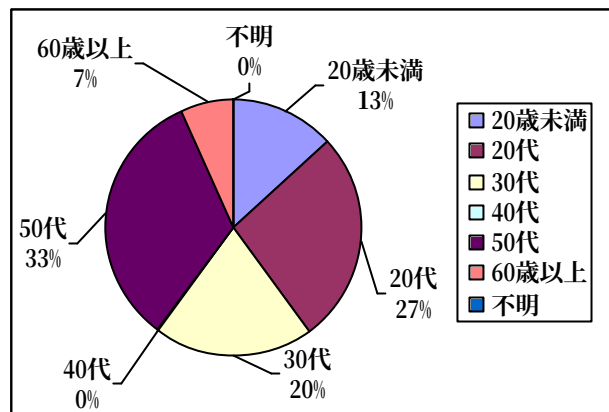


ディスカッションの様子

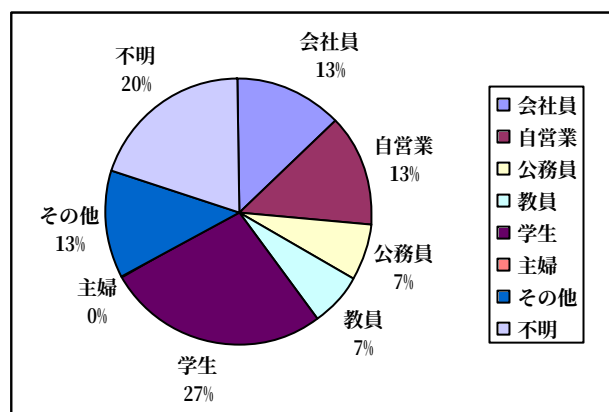
●第5分科会アンケート集計結果

Q1 参加者

年 齢	20歳未満	2
	20代	4
	30代	3
	40代	0
	50代	5
	60歳以上	1
	不明	0



職 業	会社員	2
	自営業	2
	公務員	1
	教員	1
	学生	4
	主婦	0
	その他	2
	不明	3



性 別	男性	5
	女性	8
	不明	2

Q2 分科会についての感想（複数回答可）

（良い）

おもしろかった	11
わかりやすかった	5
議事進行が良かった	3
出席者がよかった	6
勉強になった	12
ネットワーク作りにつながった	0

（悪い）

つまらなかった	0
難しかった	1
勉強にならなかった	0

【ご意見・ご感想】

- ・ NGOと一般社会（企業etc）との交流がもっと必要と考えます。
- ・ 環境問題は幅広く、解決すべき問題もたくさんあることが良く分かった。身近なところから環境問題に意識的に関わっていこうと思った。

- ・私は今高校生で15年間生きてきましたが環境問題や国際関係をどうすればいいのかなど考えてみたこともなかったし、どういう活動をしているのかなど国内外に限らず知りませんでした。ですが今日そういうお話を聞けてとてもよい経験になりました。
- ・地下水汚染の問題は孔井内の水素濃度を測定するだけでは不十分で、まず、地表からの物理探査法により地下水（帯水層）の分布形状を解明する必要があるため、JICAの専門家(地下水探査)や現地の大学・研究所との連携が不可欠。汚染対策などは工学的なアプローチが必要である。
- ・もっと突っ込んだ本音の部分の話が欲しかった。
- ・私自身、カヌーを趣味にしているため環境問題には興味がありましたが、現実にかような討論に参加する機会がなかったため大変勉強になりました。今後もありましたらぜひ告知下さい。
- ・良いディスカッションができた。定期的に行なえると良いと思います。
- ・わかりづらい部分は多くあったけど、とても勉強になった。自分の気づかない間に世界ではいろいろな問題が起こっていて、その問題を解決しようとしている人々がいることを改めて感じた。自分もこれから何かをしていきたいな・・・と思った。いろいろな問題を自分の問題でもある、と考えていきたい。
- ・若い人達の参加を頼もしく思いました。

Q3 その他、気づいた点

- ・他の分科会の内容が気になります。
- ・私は知り合いがJICAにいたため今回の分科会を知ることができましたが、一般には知ることができなかったと思います。そのため広報にももう少し力を入れていただければ幸いです。

Q4 今後もこのような国際協力に関する情報交換、ネットワーク作りの場が必要か

はい	15
いいえ	0

(どのようなイベントを期待するか)

- ・高校生や中学生のこういうことに関心のある人達を巻き込んでの報告会とか。
- ・産・官・学とNGOとのJoint Symposium。地下水汚染・土壌汚染の問題と対策。環境教育のあり方（長期計画：海外支援）（例）対人地雷の除去技術、安全な地下水の確保技術。
- ・NGO等の発表を一般の人が聞くことのできるイベントを希望します。
- ・必要であるとは思いますが具体的なことはよく分かりません。
- ・会議だけではなく、現場体験を先に行きたい。

全 体 会

2002 年 3 月 3 日（日） 15：30～16：30

(1) 目的

地域別のネットワーク作りのため、活動対象地域あるいは関心のある地域別にグループを作り意見交換を行う。

(2) 内容

まず、今回のワークショップの主催団体の1つである NGO 福岡ネットワークの二ノ坂保喜代表より、開会の挨拶があった。その後下記の 8 つの地域ごとにグループを作り、担当スタッフのコーディネートのもと、自己紹介、意見交換等を行った。全体会には、分科会の参加者のほとんどが参加したため、部屋からあふれるほどの人がおり、熱気に満ちていた。各グループでは参加者同士がお互いの活動やそれぞれが参加した分科会の様子について熱心に話し合っていた。最後に国際協力事業団九州国際センターの山口三郎所長より、閉会の挨拶があり、全体会は終了となった。

- ① 中国
- ② タイ・ミャンマー
- ③ インドネシア・マレーシア・フィリピン
- ④ カンボジア・ベトナム・ラオス
- ⑤ 南アジア・中近東
- ⑥ アフリカ
- ⑦ 中南米
- ⑧ 日本



グループトーク

